

氏名	林 蕙如
学位	博士
専門分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 4661 号
学位授与の日付	平成 24 年 9 月 27 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	日本における巡礼の成立—中世の三十三所巡礼から見る—
学位論文審査委員	主査・教授 久野 修義 教授 倉地 克直 教授 永田 諒一 教授 姜 克実 准教授 今津 勝紀

### 学位論文内容の要旨

本論文の全体構成は、「序章」と「終章」を前後に配し、本論部分が以下の三章からなっている。

第一章「巡礼」とは

第二章 院政期の参詣ブーム

第三章 室町期における三十三所巡礼

序章で、まず研究状況を概観し、巡礼についてこれまでなされてきたさまざまな分類方法や分析方法を整理する。そのうえで、西国三十三所巡礼が、回遊型巡礼の典型・代表として重視されてきたことを示し、この論文の課題として、その歴史的形成過程の考察と、それを通して日本における「巡礼」の特質やその成立意義を考えることにあるとする。

第一章は漢語経典である『大正新脩大蔵経』を検討しながら、日本側の史料にみえる「巡礼」とその類語である「巡拝」・「参詣」、さらに「聖跡」「聖地」「霊地」「霊場」の語義や用法などと比較検討を加えている。中国語としての「巡礼」の用例・語義が、8世紀後半から日本でも検出できるが、平安中期以降になるとそれが異なってくる事を指摘する。漢語経典では礼拝のニュアンスが強いのに対して、日本では「巡」の意味あいが高く、それは多くの寺院に何度も訪れ功德を積むという信仰のあり方が関係しているとする。

第二章では、その具体例として、平安中期以降の霊験寺院参詣の事例について分析がなされる。主に取りあげられるのが、第一節『小右記』の記事をもとにした10世紀末藤原実資の長谷寺詣、そして第二節院政期における百塔参りである。これらはいずれも現世利益を求めるものであるが、前者においては、古記録の丹念な読みこみから、勅使としての代参という性格と個人的祈願が重なって両立していること、在地有力者の支援があったことを指摘。後者の院政期百塔参りについては、これまで詳細な分析を行った先行研究が

なく最初の専論である。既発表『山槐記』にみられる百塔参りの一考察』（『岡山大学社会文化科学研究科紀要』33号）をベースとしているが、その後の知見も新たに加え大幅な増補改稿をおこなっている。百塔参りは、厄払いや安産など現世利益をもとめるハードな巡礼で院政期の多数重視文化の一例とみなせること、そして、そこで登場する摺塔に、後世の巡礼札を打つ行為の源流を見出している。これらの指摘の上で、第三節において三十三所観音巡礼の初発事例としてよく知られている『寺門高僧記』行尊・覚忠の巡礼を改めて考察している。その結論として、両者には修行と観音寺院群の編成結束という目的のちがいがあのではないかとの説を提示する。くわえて、その後の各種中世史料で確認できる三十三所観音と比較検討しつつ、僧侶の「巡礼霊場」と貴族の「祈願霊場」の場合、性格が異なる事も指摘する。

第三章は、室町期における観音巡礼の広範な展開についてとりあげる。まず、文正元年（1466）の聖護院門跡道興の巡礼については、これが短期間であることから、修行というよりも三十三所の統轄と正統性を付与するものだったと評価する。さらに室町期の民衆への伝播、各地域における三十三所霊場の成立（吉野・坂東・但馬・…）をとりあげ、それらを通して霊場の可移動性ということを大きな特徴として指摘する。そのほか、巡礼者に対する施行行為の意味や巡礼装束のもつ意義、そして巡礼札の成立についても考察する。こうして、巡礼の日本の特徴として巡礼体験を身近なところで再現可能となる性格、三十三所の可移動性ということを改めて指摘している。

終章はその後の江戸時代における状況を概観し、霊場から札所へという転換に近世における新たな特徴を想定して本論文をむすんでいる。

### 学位論文審査結果の要旨

全文が、達意な日本語で執筆されていると評価できる。自らの既発表論文を参考にしながらも、実質的には換骨奪胎しており、400字詰め原稿用紙に換算して約230枚、すべて新たに書き下ろした労作といってもよい。幅広い時代にわたる様々な史料を博搜しており、その解釈も堅実であり、とりわけ日本と中国側双方の文献に対する目配りによる比較検討の姿勢は貴重である。

内容的には、中国の漢語史料といえる大蔵経を博搜し、それと比較対照しながら日本における「巡礼」の特質を、奈良時代から江戸時代にいたる長いスパンのなかで探ったことは評価できる。

また、西国三十三所巡礼を中心的課題としながらも、それが成立する以前のさまざまなタイプの巡礼をとりあげ、僧侶の修行と貴族の現世利益祈願などを区別して論じ、前者のなかでも、個人的な修行と寺院群編成という性格の差異を析出したことも成果といえ、就中、院政期の百塔参りの実証分析は貴重である。

室町期以降の変化については、巡礼についての幅広い史料を博搜しながらも、同時代史

料によって、巡礼の実相を種々説明したこと、各地における三十三所巡礼のデータ集積をおこなって、その登場過程について指摘したこと、とりわけ禅僧との関係に着目して問題提起ができたことなども、本論文の成果であろう。

総体的に、堅実な史料解釈にもとづく研究だと評しうるが、巡礼成立史という観点からすれば、論じ残した点も少なくない。たとえば鎌倉期についての分析が不足しているため、民衆伝播の重要な画期となる室町期の位置付けについて、総括的な評価や巡礼史のなかでの位置付けがやや不明瞭となったことは否めない。これはまた、時期区分として平安院政期、鎌倉、室町を用いる場合と、「中世」として論じた場合の、その差異について、自覚的な使い分けの配慮が不十分であったこと、そのために論理の透明性が後退したことが関係していよう。

さらに、僧侶の巡礼、貴族の巡礼、後の民衆的三十三所巡礼、それぞれの異質性と系譜関係について十分には論じつくされておらず、さらなる説明がほしいところである。

史料の実証は着実であり、その結論についても妥当性が高く慎重になされているが、いっぼうで「日本的」巡礼ということについては、もうすこし意欲的に論じてもいいと思われた。学位審査会ではこの点について、審査委員との間で世界的な視野にもとづく巡礼のさまざまな特質について、やり取りができたことを付言しておく。

以上、本論文についてはなお検討すべき課題を種々指摘できるが、いずれも今後の展開に期待するがゆえであり、本論文が学位論文としてふさわしいレベルにあり、今後も課題探求をすすめていくだけの研究力量が具わっていることも十分にうかがえた。この点、審査委員一同認めるところであり、したがって本論文を学位論文としてふさわしいものとすることに満場一致で結論付けた。